した。
ニカメイチョウ第2化期に対するパラチオンおよび
EPN粉剤4.5kgおよびEPN乳剤1000倍液の散布では、
ケモノ類は無散布区の約35～55％に減少し、1化期の
場合と同じようにケモノ類の少ない期間が続いた。しかし、
ツマゴヨコバイおよびウンカ類の防除効果は穂の
収穫まで持続し、散布区の密度は無散布区のそれより
最後まで低く経過した。1・2化期におけるこの違いは、
ニカメイチョウの散布およびツマゴヨコバイおよびウン
カ類の密度の差に原因すると考えられた。
\[40\] イネトモシの性比について
（三重県）山下善平

野外で採集されたイネトモシ成虫の見かけ上の性比
の変動が世代別の移動習性で見られる事実は、すでに指摘
したところである。

そこで、この見かけ上の性比が変動する原因を明らかにするため、越冬期、水田形態、山間地等の幼虫、成虫について調査を試みた。

その結果、幼虫、成虫、羽化率等には性差が殆ど認められず、成虫の移動に関与した性差が主な原因であると考えられたに至った。これらのことは、花びらを
花粉に成虫数を指標とする予防法では、注意を要する現
象と思われる。

41 モンシロチョウの生態学的研究 V.
高知市近郊のモンシロチョウ幼虫の年間を通じた発生状況
（高知県）岡部正明

高知市近郊のモンシロチョウの生態について幼虫の冬
期の活動状態、成虫の年間の発生消長その他のについて調
査して来たが、それらが地域性や食草の状態に関
係しているようである。そこで更に幼虫の年間を通じた
発生状況を知るために、食草及び幼虫の卵、幼虫などに
って年間を通じての動きを調べた。

幼虫は食草の単位数では5月に最も多いが、夏期は
少なくなり、11月頃には再び多くなる。これは食草の栽培
状況を合わせて考えることが必要と考えられる。

42 イネカラバエの地域的系統に関する研究
第2報 鹿瀬（2.3化発育）産の発育生態
（北摂農試）岩田俊一・岩田俊一

イネカラバエの2.3化発育が発現して無性繁殖相を示している。そこで、発育期自
体の発生生態を知るため新潟県鹿瀬から秋期に越冬幼
虫発生期調査を行った。越冬後の経過間隔が長いため並べて長く、且

43 ズィムシアカタマガチョの産卵および増殖における成虫密度の影響
（京大農）久野登三

ニカメイガの卵産卵数ズィムシアカタマガチョの天敵
としての価値を再検討する目的でコンタミネート区を
用いた観察として、卵の孵化時の密度と次世代発成虫数
との関係を調べ、同時に次世代発成虫数をもたらす要
因としての産卵行動を観察した。卵の密度と次世代発成虫数との関係は交互相関を
示した。また、卵の密度が大きくなると、孵化率が著しく
なりバランス理論にしたがう傾向を示した。

44 ニカメイチョウとその寄生性とナカタマガチョの
生活史の直接性とその機構
（京大農）藤本敬明

害虫とその天敵の生活史の同時性（synchronization）は
両者の個体数を制御する一要因であり、天敵の効果を左
右する重要な問題である。

ここではニカメイチョウ Chilo suppressalis とその
卵寄生虫でナカタマガチョ Chelonus muma
katae についているこの同時性の条件の下での生活史の
同時性を研究した。25℃では最も同時性が良好、それ
より低温温温に近い条件においてはそれぞれの寄生虫の
卵の卵産卵期間が短くなることを示した。寄効
虫の産卵期から幼虫の発育期までの発育期間は長く、寄
虫期が長くなる場合には寄生虫の発育が急速に進むことが
わかった。